『御射古風帖』(1791—1792)にみる18世紀末の朝鮮弓術： 弓術種目と弓具に着目して

李 燦雨

Chanwoo Lee: Korean traditional archery in the late 18th century as described in the “records of the old custom of King’s archery”, focusing on archery events and equipment. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 57: 501-513, December, 2012

Abstract : This study investigated Korean traditional archery in the 18th century by reference to the *Eosagopungcheop* (records of the old custom of King’s archery) of King Jeongjo, who was known for both literary and military accomplishments in the Joseon era. Through these records, we were able to obtain information on the types of archery, the variety of targets and arrows, the methods of scoring and recording, and the features of traditional archery. The findings were as follows:

1. The arrows employed were *Yuyeopjeon* (willow-leaf arrow), *Soso* (small arrow), and *Cheoljeon* (iron arrow). All of them featured in examinations for military officers.
2. In terms of quantity and frequency, the willow-leaf arrow was used most commonly.
3. The small arrow was considered the piece arrow, which was a weapon unique to Korea.
4. It became clear that the iron arrow, which was very heavy and thick, was used to break shields. It seems that this type of arrow was considered the most important for military officer examinations, because it played an important role in breaking down the enemy’s defense in Korea, depending on the archery tactics.
5. The targets employed included cloth targets, leather targets and a variety of other types.
6. It was clarified that in terms of accuracy, targets were ranked in order of size. On the pierce leather target standard, the other targets appeared to be named ‘Fragment’, ‘Small’, ‘Palm’ in descending order of size.
7. Each type of arrow was paired with a specific target. The willow-leaf arrow was paired mainly with leather targets. The small arrow was paired with both leather and cloth targets, and the iron arrow was paired with shield or club targets.
8. According to the records, a practice session comprised basically 10 sequences, each involving the shooting of 5 arrows.
9. The scoring system differed depending on the type of target. For leather targets, the score was separated into two hit zones: the center and the surrounding area. However, the score was not separated in this way for cloth targets.
10. The willow-leaf arrow used on leather or club (cudgel) targets was the item to compete in accuracy. The small arrow, used mainly on cloth targets, was used in contests held on shooting ranges. The iron arrow, used mainly on shields or clubs as targets, was used for determining destructive power and accuracy.
11. The inscriptions in the records are divided as to whether the shooting sequence was single or multiple.
12. The records reveal that Korean traditional archery was still widely practiced at the end of the 18th century, when firearms had become common in all parts of the world.

Key words : bow and arrow, archery record, archery training, Korean archery, Gungdo

キーワード : 弓矢, 弓術記録, 習射, 朝鮮の弓術, 韓国弓道

1. はじめに

韓国では古くから、日本の得意とする武術は剣術で、韓国の得意とする武術は弓術であると言われてきた。たとえば、『朝鮮王朝実録 宣祖実録』には「日本は刀が、朝鮮は弓馬が得意技である」（宣祖、1592）とか「朝鮮の武士はもっぱら弓術にのみ熟中していた」（宣祖、1594）という記述がある。また、『武芸図譜通志』にも「朝鮮の練兵は弓矢一技に止まり、剣や槍などの技は聞いたことがない」（李徳懋ほか、1790）と書かれている。このことは、朝鮮時代（1392—1910）の武士の登竜門であった当時の武科試験（1408—1894）や大射礼などの宮廷行事や軍事訓練などにも見られ、多様な弓術やそれに伴う弓矢と的などが確認できる（崔恒ほか、1485；徐榮輔・沈象奎、1808；趙斗淳ほか、1865）。

しかし、開港（1876年）を起点として開化期^{注1}を迎えた朝鮮の弓術は、西洋文物の導入や武科試験廃止（1894年）により急激に衰退した（黄鶴亭百年史編纂委員会、2001, p. 28）。そのため、膳録^{注2}類、日記類、儀軌^{注3}類とそれらを基に作られた『朝鮮王朝実録』などの朝鮮時代の史書や法典や百科事典などから、多様な弓術の種目名や弓具名は確認できるものの、それらがどのようなものであり、どのように用いられたのか等、具体的なことは明らかになっていない。このことに関しては、現存する最も詳細な弓術書として知られ、韓国弓術の教科書と呼ばれている『朝鮮の弓術』ですら上述の史料に頼り、七つの弓、八つの矢、二つの的の規格や簡略な紹介に止まっている。つまり、正両弓・礼弓・木弓・鉄弓・鉄胎弓・𦏧・角弓などの弓、木箭・鉄箭・礼箭・片箭・𦏧箭・將軍箭・細箭・柳葉箭などの矢、幘（射布）・貫革^{注4}の的が紹介されているが、具体的な解説はなく、「練習用の角弓以外はその使い方や使い道が受け継がれず、ほとんどの弓具も実物がなくなり、その名称以外のことは説明のしようがなくなった」（李重華、1929, pp. 30-31）と記しているほどである。その状況は現代の韓国におい

ても変わりなく、角弓・柳葉箭・貫革の一種目のみの弓術が行われているに過ぎない（大韓弓道協会、2000, p. 37）。

名称以外に伝統弓術の詳細がほとんど失われた現在、比較的その詳細を窺える手がかりとなっているのが武科試験である。武科試験は当時の法典によりその資格、科目、方式などが定められていたため、弓術試験の科目やその運営の全般に関してはよく知られている（忠南発展研究院、1998）。そして、試験科目としての弓術の種目、採点方式、射距離、用具の規格なども徐々に明らかになってきている（沈勝求、2000）。しかし、なぜそれぞれ異なる射距離、矢、的などを用いる様々な弓術が存在したのか、それぞれの弓術の機能や特徴とそれに伴う弓具の扱いなどはどのようなものであったのかはまだ不明なところが多い。また、武科試験という特定の環境で行われる弓術では、限られた種目と射量で実施されるので、多様な弓術のそれぞれの機能や特徴などを十分確認することはできない。そのため、できる限り様々な状況での弓術に目を向ける必要がある。従来、韓国弓道^{注4}界では、習射^{注5}や弓術大会の詳細な成績の記録である獲記紙^{注6}は1960年以後のものしか知られていなかったが、近年1930年代の獲記紙が発見され、注目されるようになった。しかし、本研究で用いる史料はそれより古く、弓が実戦で使われた時代のものであり、管見の限り弓術の成績の詳細を窺える最も古い史料である。このような点を考慮すると、弓術の種目や射量などの記録が豊富である『御射古風帖』（1791—1792）は、わずか2年間の王の習射を記録したものではあるが、18世紀末朝鮮の弓術の種目やそれに応じた弓具が窺える貴重な史料であると言えよう。

また、18世紀の朝鮮は文化絶頂期といわれる真景時代^{注7}であり（チェ・ワンス、1998）、特に正祖時代は朝鮮時代において社会・経済・文化面で大きく栄えた時代であった（羅永一、2003）。韓国弓術史においても19世紀からは、弓術が火薬兵器の性能に圧倒され、弓術を中心とした旧式軍隊が解散し、銃を中心とした新式軍隊が創設（1881年）されたり、武科試験が廃止されたりす

るなど、弓術の軍事的・社会的役割の変化による弓術の衰退が加速化される。さらに、この時期からは外来文化との接触が多くなり、弓術においてもそれによる変形が見られる。それに比べ18世紀末は、外国勢力からの干渉がなく伝統的な文化を享受し、軍事的・社会的に弓術が盛んであった最後の時代で、それに伴う弓術行事^{注8)}や弓術訓練などが従来どおり行われていた。したがって、18世紀末の朝鮮の弓術について明らかにすることは、外来文化の輸入や実用性の低下によりその形が変化する前の朝鮮の弓術を解明することになり、これは韓国の伝統的な弓術を究明する上で非常に重要な部分であると考えられる。

したがって、本研究ではこの史料の分析を通して、名称以外はほとんど伝わっていない当時の弓術の種目やその機能と特徴、矢や的の種類と使い分けや使用頻度、得点と記録方式などを解明し、18世紀末における朝鮮の弓術形態とその特徴を明らかにしたい。

2. 時代的な背景と『御射古風帖』^{注9)}

正祖（朝鮮時代第22代王、在位1776—1800）が在位した18世紀後半の朝鮮は、朋党^{注10)}が対立する時代であった。正祖の祖父である英祖（在位1724—1776）が支持する朋党と当時の太子であった正祖の実父が支持する朋党が対立し、実父が死に追い込まれるほど、党争は激しかった（李泰鎮，2006，pp. 175-189）。このように朋党間の争いにより父を亡くし身の脅威を感じながら育った正祖は、即位後に朋党を牽制しながら実父の遺恨を晴らすため、王権の強化と様々な改革に臨んだ。そのために欠かせないのが、党派の利害関係と緊密に繋がっていた当時の軍部の掌握と改革であったため、正祖は軍権の掌握に力を尽くした（韓永愚，1998，pp. 76-85）。

まず、正祖は壮勇營という新しい親衛部隊を作り、大臣の反対にもかかわらず徐々に親衛部隊の規模を拡大していった（李泰鎮，1985，pp. 262-273；裴祐晟，1991）^{注11)}。次いで、実父の墓を都城の外に移し、墓参のついでに軍事訓練を行っ

た。また、『武芸図譜通志』（1790年）を出版し、その内容を訓練に導入するなど、兵学と武芸を奨励した（裴祐晟，2001）。さらに、1791年には「辛亥通共」^{注12)}という経済政策や「抄啓文臣」^{注13)}という委託教育制度を最上位武官職にも実施し、親衛勢力の養成と軍部や党派に流れる政治資金の抑制を企てた（韓永愚，1998，pp. 81-85）。それに加え、軍部の反対にもかかわらず、実父の墓の警備を理由として1793年には中央軍より規模の大きい壮勇營の地方部隊（約5,000人）を創設し、その忠誠親衛部隊を基盤に軍部を掌握した。そして、1795年には亡くなった実父の還暦を記念する墓参に、歴史に残る大規模な精鋭部隊を連れていき、自ら軍事訓練を指揮しながら首都防衛を点検するなど、軍部を掌握した王権を見せ付けた（園幸乙卯整理儀軌，1795）。さらには、1796年「華城」という最先端の城郭を建設し、難攻不落の防衛体制を整えた（韓永愚，1998，pp. 90-107）。

本研究の史料として用いた『御射古風帖』は、このように朋党が対立し、激しい党争が行われる中で、正祖が軍権を掌握し、王権強化に尽力した時期に王自ら行った習射を記録した弓術日誌である。これには正祖が1791年（正祖15）7月7日から1792年（正祖16）12月27日まで114回にわたって行った各種弓術と、その際に関連機関や臣下に授けた賜り物の内訳などが日付別に記録されている。

表1はこれらの記録を矢、的、射量、的中矢数に着目して日付ごとに整理したものである。表1からわかるように、当初はほぼ月1回行われていた御射が1792年秋から急激にその回数を増やしていった。その背景には、前述したような1793年の親衛部隊の大幅な増強を通して軍権掌握を成し遂げようとする正祖の狙いがあったと推察される。すなわち、軍権掌握の前に軍部や臣下らとの結束を強め意見を取りまとめるため御射を頻繁に行い、かつ王自らが弓術を得意とする当時の軍人にその腕前を見せつけることにより軍の実権者としての威厳を見せようとしたと考えられる。このように、当時の弓術の詳細や政治背景を窺える貴重な史料といえる『御射古風帖』は、1994年に韓国の弓矢展示会（陸軍博物館）にお

いて紹介されたことがある。しかし、その際に展示されたのは、それまでに存在が確認された3回分の御射古風記録のみであった。そのため、『御射古風帖』は最近まであまり注目されず、研究も行われることはなかった。著者は朝鮮時代の王室図書館であった奎章閣^{注14)}の書庫に多量の『御射古風帖』（ソウル大学校奎章閣，奎9985；奎9991；奎10252；古大4206-80-1；古大4206-80-2）が保管されていることを発見した。『御射古風帖』（奎9985）は『御射臺帖』とも言い、正祖の御射を李敏采（楊州牧使・文官，1740—不詳）が記録した『御射臺碑』（京畿有形文化財第82号）を拓本した5折8面1帖の書帖であり、『御射古風帖』（奎9991）は尹行任（抄啓文臣，1762—1801）が記録した永興府の扁額を拓本した4折7面1帖の書帖であり、『御射古風帖』（奎10252）は徐榮輔（文官，1759—1816）等が記録した奎章閣の扁額を拓本した7折13面1帖の書帖である。また、『御射古風帖』（古大4206-80-1，古大4206-80-2）は壮勇營で編纂された58折116面2帖（29折58面×2帖）の書帖であり、『御射古風帖』（陸軍博物館）は李海愚（武官，1760—1832）に授けた1折2面の書と吳載純（文官，1727—1792）に授けた3折6面の書帖である。

上に記したように「御射古風」という風習についての研究は、これまで十分に行われてはいないため、これがいつからどのような経緯で行われるようになったのかは不明である。また、正祖以外の「御射古風」に関する史料は報告されていないため、正祖時代以外に行われたのか否かもわかっていない。しかし、弓術種目、矢と的の種類、射量、全体成績、各巡^{注15)}の詳細成績、日付、古風品目などが詳しく記録されている『御射古風帖』は、現在とは異なる当時の弓術の種目、弓具、得点方式、記録に関する様々な様子が窺える史料である。

また、『御射古風帖』は特殊階層である朝鮮時代の王の弓術記録ではあるが、この記録は王が宮殿で一人で行った弓術記録ではなく、首都と地方の各官庁を視察しながら軍事を強化し、現地の官

僚を励ますため、文官武官を問わず官僚と共に自ら弓を引き、その成績と賜り物を記録したものである^{注16)}。したがって、各地で100回以上にわたって行われた「御射古風」の弓術は、射礼のような行事としての弓術とは異なり、当時の武術としての弓術により近いものであったと推察される。

3. 弓術の種目と特徴

図1のように『御射古風帖』には古風、肩書き、氏名、矢と的の種類、射量、全体成績、各巡の詳細成績、日付、古風品目が書かれている。その中で弓術に関する記録は矢と的の種類、射量、全体成績、各巡の詳細成績である。この記録を詳しく分析してみると、現在では失われてしまった朝鮮時代の弓術の一端が浮かび上がってくる。

まず、矢と的の種類が記されているところには、現在その存在や意味が不明となってしまった矢や的の名前が多く現れる。「角弓」に「柳葉箭」という矢を用い、「貫革」という的に向かって射る競技のみが伝わっている現在の弓術に比べ、当時は様々な矢と的を使う多様な弓術種目が存在していたことがわかる。「矢と的の種類」のところには基本的に使用された矢と的が記されているが、射量や射頻度が最も多い柳葉箭の場合は、的に関する記載が省略されていることが多い。それは、柳葉箭は武科試験や普段の習射で最もよく用いられた矢であり、その際の的には「貫革」がよ

図1 『御射古風帖』の記録

表2 各弓術種目*の射量と点数

矢	的	射頻度	射量(巡)	的中数	1巡平均矢数**	点数(%)
柳葉箭	貫革(夜射)	59	404	1,636	4.05	52
		1	1	3	3	60
	掌革	16	22	65	2.95	43
	片革	3	3	13	4.33	60
	小方革	1	1	3	3.00	40
	片布	2	2	8	4.00	80
	棍	9	11	33	3.00	56
	扇	2	2	7	3.50	70
	小團扇	1	1	3	3.00	60
小計		94	447	1,771	3.43	58
鉄箭	防牌	3	3	10	3.33	53
	掌革	1	1	3	3.00	50
	棍	3	3	11	3.67	73
	扇	1	2	3	1.50	30
小計		8	9	27	2.88	52
小々	貫革	1	1	1	1.00	20
	片革	4	4	19	4.75	68
	小布	2	6	11	1.83	38
	片布	3	3	10	3.33	67
小計		10	14	41	2.73	48
鳥銃	貫革	2	3	3	1.00	10
総計		114	473	1,842	3.01	51.67

*：ここでは、矢と的の組み合わせのこと。

**：矢数：的の真ん中に入った「貫中」と周辺部に入った「辺中」とに関係なく、的に中った矢の数。的中数。

く用いられたため、「柳葉箭-貫革」の場合は記す必要がなかったからだと考えられる。柳葉箭を射る場合、貫革以外の的を用いる際には的が全て記されている。また、柳葉箭以外の種目で、的として貫革が用いられた場合にも、貫革が記されている。これらのことから柳葉箭の場合、最もよく使われた貫革を的として用いる際は、的の記載を省略したと考えられる。柳葉箭以外の「鉄箭」「小々」「鳥銃」の場合には、基本的にそれぞれの矢や銃弾に対応した的が記されている。『御射古風帖』に記されている矢や的の種類ごとに分類し、その射量と点数を整理したのが表2であ

る。表2を見ると、当時も現在と同じように柳葉箭を貫革に射るという組合せが最も多く、これが弓術の標準であったと考えられる。

1) 箭(矢)

表2を見ると銃である鳥銃は別として、弓術として使われた矢は「柳葉箭」「鉄箭」「小々」の三種類である。この中で射頻度や射量では柳葉箭が最も多く、次いで小々、鉄箭の順である。柳葉箭は現在まで伝わっている唯一の矢で、武科試験や習射の時に多く使われたと言われている(李重華, 1929, p. 88)。このことは、114回のうち92

回で柳葉箭を使用していた『御射古風帖』の記録にもよく表れている。そして、柳葉箭の場合は「片布」のような布類のも若干使われたが、「貫革」「掌革」のような革類のが圧倒的に多く使われたり、「棍」や「扇」のような小さなものも使われたりした。このことから、柳葉箭は正確性を測る競技であったことも確認できる。

柳葉箭以外はいずれも現在は使われていないもので、その使い道や特徴は明らかになっていない。特に、「小々」という矢は現在の弓術界では全く知られていないもので、どのような矢なのかも不明である。しかし、『御射古風帖』全体をよく見ると、小々の実体を推測できるいくつかの手がかりが浮かび上がる。まず、小々以外のすべてが武科試験の種目であることから、小々も武科試験種目の一つであった可能性が高い。そして、小々には布類と革類の的が約2:1の比率で使われていることから、小々は基本的には射距離を競いながら正確性も重視した種目であったと判断できる。しかし、柳葉箭や鉄箭ではよく使われていた正確性を競う一番小さなものである掌革や棍は使われていないことから、小々は掌のような革や細い棍は狙えないほど、柳葉箭や鉄箭より遠い距離を射るものであったと考えられる。このようなことから「小々」は朝鮮の得意技（李睟光，1604）であった「片箭」であろうと推察される。柳葉箭や鉄箭より遠くへ飛ばせる片箭は、矢の破片のように普通の矢の半分以下の短い小さな矢であり、「童箭」「筒箭」とも呼ばれた朝鮮時代の秘密兵器であった。片箭は国境の近くや北方異民族と倭人が多いところでは練習も禁止されるほど、朝鮮としては特別な武器であった（世宗実録，1431；燕山君実録，1503）。小さく短い矢で朝鮮の秘密兵器であった片箭を小々と記したことは十分あり得ると言えよう。

「鉄箭」は名称の通り鉄で作られた最も重い矢^{注17}である。御射の鉄箭に使われたのが「防牌」「掌革」「棍」「扇」のように非常に小さいばかりであったことから、その射距離が柳葉箭や小々より短い種目であったことがわかる。しかし、鉄箭は射距離が一番短いにもかかわらず、その重さ

により戦争用としてよく用いられ、武科試験では最も重視された種目であった（成宗実録，1472；正祖実録，1777；純祖実録，1814）。普段の習射で最も多用される柳葉箭に比して8倍近く重く、射距離も短い鉄箭をわざわざ戦闘で用いたのにはそれなりの理由があったはずである。しかし、その具体的な使い道はこれまで知られていない。戦闘用弓術の具体的な様子が明らかになっていないため、従来の研究では実録の言及（成宗実録，1472）に基づき、鉄箭の役割は敵を防ぐためではなく、ただ弓力を測るだけであったという見解に留まっていた（沈勝求，2000）。しかし、ここで注目したいのは『御射古風帖』では鉄箭的として「防牌」が主に使われていることである。防牌即ち盾は的として鉄箭以外の矢の場合には全く使われず、鉄箭の場合にのみ主眼的として、また「御射古風」の1番目の的として使われている。これを鉄箭の特徴である戦争用の矢、最も重い矢、太くて使いづらく射距離も短いにもかかわらず武科試験で最も重視された種目、などに関連させて考えてみると、鉄箭の使い道が推察できる。

一般的に集団と集団が向かい合う戦場では、接近による味方の被害を防ぐため、まず遠くから多量の矢で攻める乱射が一般的であった（姜性文，2000，p. 70）。これに対し身を守るために考案されたのが防牌で、通常敵が100歩近くにまで近づくと、彭排という盾を扱う兵種をぎっしり並ばせ乱射に備えた（世祖実録，1467）。この盾は弓を射る側から見ると矢を射る行為自体を無効にさせる最も邪魔な存在だと言えよう。特に、伝統的に清野入保戦術^{注18}に従い（孫永植，2009，p. 19）弓術に頼る朝鮮では、様々な矢のそれぞれの役割を生かすために、必然的に盾に対する方策を考えなければならなかった。この盾による防御を破る役割を担ったのが鉄箭だったのである。

戦闘初期に100歩の距離からの乱射やそれを防ぐための防牌専門兵種を前面に配置したことと、普通の矢より8倍近く重い鉄箭が武科試験で最も重視され、他の種目とは異なる100歩の射距離で行われたこととは無関係とは言えない^{注19}。『御射古風帖』で鉄箭的として防牌が使われて

いることや、鏃が円くて刃のない鉄箭の特徴（申叔舟，1474）からも，その使い道は殺人用ではなく，防牌などを破るためであったことがわかる．さらに，松で作られた彭排の盾を鉄箭の射距離である100歩離れたところに置き，矢の貫通力を測ったことから（世祖実録，1467），鉄箭の役割がよく窺える．

2) 的

一種類しかない現在の単純な的に比べ、『御射古風帖』には「貫革」「掌革」「小布」「片布」「片革」「小方革」「棍」「扇」などの多様なのが現れる．的に関してはこれまでほとんど研究されていないため，わからないことが多いが，柳葉箭，鉄箭，小々はそれぞれ射距離が異なるため，それらに使うのも色々であったと考えられる．その中でも最も多く現れる的は貫革で，全114回の「御射古風」のうち63回で用いられている．また，射量としても最も多く，全473巡中の409巡で貫革が使われている．しかも，夜射^{注20)}や新たに導入された武器である鳥銃の場合でも，貫革が的として使われている．つまり，当時は貫革が一番多く使われた標準的な的であった可能性が高い．次いで掌革，棍，片布，片革の順で多く用いられている．

これらの的は使う矢により，大きさ，形，置く距離などは異なるが，その名称や武科試験の規程などから大きく三つに分けられる．一つ目は四角い布で作られた布類の的，二つ目は的の中心部と周辺部を区別するため，真ん中に革を貼った革類の的，そして三つ目は棍や扇など，それ以外の的である．また，表2からわかるように，矢によって主に使われる的が異なっていた．これはそれぞれの矢の役割により，それらに適した的が使われたからだと考えられる．例えば，柳葉箭の場合には，貫革，掌革などの革類の的と棍が，小々の場合には貫革，片革などの革類の的と小布，片布などの布類の的が，そして鉄箭の場合には防牌や棍などが主に使われている．後述するが，これらの的はその種類によって大きさや得点方式が異なる．基本的に布類の的は大きく，どこに中つても

同じ点数が与えられたので，正確性よりは射距離を測るための的であり，革類の的は中った部位により点数が異なるので，正確性を測るの的であったと考えられる．つまり，革類や細い棍を的として使う柳葉箭は正確性を競う種目であり，布類の的と革類の的を兼用する小々は射距離と正確性を競う種目であった．また，防牌や貫付き^{注21)}の棍などの的を主に使う鉄箭は，一定の破壊力を持つ重い矢を射る弓力に加え正確性も競う種目であったと考えられる．

そして，矢ごとの射距離は定められていたため，同一の矢の場合はそれぞれの的までの距離は同じであった．それゆえ，表2の柳葉箭に関する数字からわかるように，掌革は他の的に比べ1巡平均矢数(的中数)が低いことやその名前から，貫革や片革より小さい的であったと考えられる．また，表2の種目ごとに使われた的のうち，2種目以上で用いられた的を的のごとの1巡平均矢数で比べると，的中率は片革>貫革>片布>小布>棍>掌革>扇の順であったことがわかる．このうち，片革と貫革の場合は，貫革の射量のはるかに多いことや片革の実施が弓術に慣れてきた後半に偏っているため，単純に比較するのは難しい．そのため，片革と貫革が同一日に用いられた場合の記録を比べてみると，片革より貫革の的中率が高いことがわかる．それゆえ，正祖の弓術技量の向上や同一日の成績を考慮に入れると，片革と貫革の順序が逆転し，的中率は貫革>片革>片布>小布>棍>掌革>扇の順となる．このような同じ射距離での的中率から，的の大きさの順序もこの順であったと推定される．すなわち，的の基準である「貫革」より小さいものを「片」と名づけ，さらにそれより小さいものを順に「小」「掌」と名づけたと考えられる．

4. 射量と得点・記録方式

『御射古風帖』にはその日に行われた弓術の種目ごとに，射量と全体成績と各巡成績が記載されている．例えば，図1のように壬子(1792年)10月12日の古風帖には「古風 蓮府李 憲 御射

柳葉箭十巡四十一矢五十分 第一巡四中辺辺辺
第二巡四中五分貫辺辺 … 第十巡四中五分辺
辺貫 壬子十月十二日 弓一張」と記されている。これは、「古風授与者は李堯憲^{注22)}大臣（蓮府）で、王が柳葉箭を10巡射し、全体成績として41本を中て、50分の点数を得た。各巡成績としては第1巡では辺に4本中り、第2巡では貫に1本、辺に3本中り、5分の点数を得…第10巡では辺に3本貫に1本中り5分の点数を得た。射日は壬子(1792年)10月12日で、古風として弓1張を与えた」という意味に解釈できる。このような古風授与者、弓術種目(矢/的)、射量(巡)、全体成績、各巡成績、日付、古風品目の全体記録の分析を通して当時の得点と記録方式を詳しく知ることができる。

これらの記録には現在と大きく異なるところが二つ見られる。一つは、最も多く行われた柳葉箭の場合、その射量の基準が現在の9巡とは異なり10巡であったことである。すべての柳葉箭記録が10巡だというわけではないが、はじめの数回の単巡射記録以外はほとんどが10巡である。また、10巡ではない場合でも5巡を射るか、時には先5巡・後5巡のように5の倍数で行われており、10巡が基準射量であったと考えられる。さらに、実録の記録において正祖が自らの弓術を述べる中で、10巡が基準であると言及している（正祖実録，1792）^{注23)}。このように朝鮮時代の柳葉箭の射量は、5の倍数である10巡がほとんどであった。しかし、現在の試合は3巡、審査は9巡、習射も9巡など、3の倍数で行われている。現在なぜ9巡が基準になっているのかということについては不明である。

現在の弓術と異なる他の一つは、得点・記録方式である。『御射古風帖』には種目ごとに全体成績と各巡成績が書かれているが、的によってその得点・記録方式が異なっていた。それを確認するため、的と矢による種目ごとの記録を抜粋したのが表3である。『御射古風帖』には表3のように全部で10種類の的が現れる。

表3をみると、的によって各巡成績が「○中○分」と表記されたり「○中」と表記されたりす

るなど、的の種類によって得点方式が大きく異なっていたことがわかる。小布・片布などの布類的は「○中」、貫革・掌革・片革などの革類的は「○中○分」或は「貫○中、辺○中」と表記されている。つまり、布類的はただ中りの数を数えて「○中」と表記するのに対し、的の真ん中に革を貼った革類的の場合は、的の内側(革のところ)に中った「貫中」と的の周辺部に中った「辺中」を区別し、同じ中りでも辺中には1分の点数を、貫中にはその2倍である2分の点数を与えている。例えば、同じ3本の矢が中ったとしても、辺3中の場合は3分を、貫3中の場合は6分を、貫1中辺2中の場合は4分の点数を与えたのである。このように中る部位によって点数が異なる革類的を使うのは、弓術の正確性を競うためであると言えよう。的の材質と形状により布類的、革類的、その他の的に大きく分けられるが、このような得点方式によって分類すると、布類的と革類的の二つに大きく分けることができる。つまり、その他の的の中でも、貫を表す紙を付けた棍や貫辺を区別した防牌は革類的と同様に貫辺を区別する的として使われたと見られるからである。このような的による得点方式の多様性は、現在のように柳葉箭と貫革という1種類の矢のしか用いず、大きな的のどこに中っても1点になる得点方式とは大きく異なるところである^{注24)}。

また、成績の表記は、射量が単巡であるか複巡であるかによって異なっていたことがわかる。表3に示した例のように、複巡の場合は「○巡○矢」或は「○巡○矢○分」のように、射量(○巡×5矢=射た矢の数)と中った矢の数(矢)と全体点数(分)が先に表示される。そして、その後「第○巡○中」或は「第○巡○中○分 貫辺辺」若しくは「貫○中、辺○中」のように、各巡別の成績(中)が表示されている。それに対し、単巡の場合は「○中」或は「○中○分」のように、1巡のみの成績であるため、中った全体の矢の数を表す「矢」の代わりに、各巡の部分成績を表す「中」で成績が表示され、場合によってはもっと詳しく「貫貫辺貫辺」のように、矢ごとに貫中か辺中かまで表記された。つまり、「二巡六矢九分」の成

表3 弓術種目の点数・記録方式例

的	矢	巡	全体成績（矢/分）の例		各巡成績（中/分）と詳細表記例			備考
貫革	柳葉箭	単巡			三中	四分	貫一中辺三中	
		複巡	四十九矢	七十五分	五中	七分	貫貫辺辺辺	
	小々	単巡			貫一中			
	烏銃	複巡			辺二中			
掌革	柳葉箭	単巡			三中	四分	辺辺貫	
		複巡	七矢	十一分	五中	七分	辺辺貫辺貫	
	鉄箭	単巡			三中	五分		
片革	柳葉箭	単巡			五中	八分		
	小々	単巡			五中	九分	貫貫辺貫貫	貫四中辺一中
小方革	柳葉箭	単巡			三中	四分	辺辺貫	百二十歩
小布	小々	単巡			二中			
		複巡	九矢		三中			
片布	柳葉箭	単巡			四中			
	小々	単巡			三中			
棍	柳葉箭	単巡			二中			
		複巡	六矢		四中			付貫紙
	鉄箭	単巡			四中			付貫紙
扇	柳葉箭	単巡			三中			
	鉄箭	複巡	三矢					
小團扇	柳葉箭	単巡			三中			長三寸廣同
防牌	鉄箭	単巡			貫四中			

績を見れば、総2巡を射て6矢を中て9分の点数を得たことがわかる。そしてさらに、6矢9分の点数を見ればそのうち3本は的の内側部分である革に中てた貫中で、3本は周辺部分に中てた辺中であることがわかるのである。

5. ま と め

『御射古風帖』は、正祖が約1年半にわたり行った各種弓術と、その後に関連機関や臣下に授けた古風の内訳などを日付別に記録した弓術日誌である。この日誌の分析を通して、当時の具体的な弓術の様子や、現在ではその存在や意味が不明となっている矢や的の役割や特徴、得点方式、記録

方式などについて以下のことが明らかになった。

(1) 御射で行われた弓術種目は全部で16種目で、柳葉箭、小々、鉄箭のような3種類の矢とそれぞれの矢の役割を生かすための多様な的用いられた。

(2) 的には貫革、掌革、片革、小方革、小布、片布、棍、扇、小團扇、防牌など10種類があった。これらのうち、貫革、掌革、棍などは多様な矢との組み合わせで多く使われたが、小布、防牌は特定な矢の場合にのみ使われた。また、小方革、小布、扇、小團扇のようにわずかしが使われなかったものもあった。その中で当時最も多く用いられ、的の標準になっていたのは貫革で、次いで掌革、棍などが多く用いられた。これらの的は、

布類の的、真ん中に革を貼った革類の的、棍や扇などのそれ以外の的の三つに分けられる。

(3) 的の種類によって得点方式が異なった。布類的是どこに中っても同じ点数であったが、革類的是中った部位により点数が異なった。

(4) 貫革＞片革＞片布＞小布＞棍＞掌革＞扇のような中率から、的の大きさの順序がこの順であり、貫革を標準にそれより小さい的を「片」、それより小さい的を「小」、さらに小さい的を「掌」と名づけたと推察される。

(5) 矢は射頻度や射量として柳葉箭、小々、鉄箭の順で多く使われた。いずれも武科試験で使われるものであった。柳葉箭の場合は貫革、掌革、棍の的が主に使われ、正確性を測る競技であることが確認された。小々は貫革、片革の的を用いていることから正確性を競う種目ではあったが、最も小さい掌革や棍を的として使わず、むしろ小布、片布のような布類的を主に使っていることから、遠い距離を狙う種目であることが判明した。また、このことと「小々」という名称から、この矢は朝鮮時代の秘密兵器であった小さい矢「片箭」であると推察された。鉄箭は、最も重くて太く射距離も短いなど、使いづらい矢であるにもかかわらず、なぜ武科試験で非常に重視されたかが、的として使われた防牌から理解できた。弓術に頼る朝鮮の戦法では、弓術を生かすため、敵の盾など防牌を破ることが重要であり、鉄箭が戦時にその役割を担ったからである。鉄箭は一定の破壊力を持つ重い矢を射る弓力に加え、正確性も競う種目であったことが判明した。

(6) 記録の分析を通して当時の射量と得点・記録方式が明らかになった。最も多く行われた柳葉箭の場合、その射量の基準は現在の9巡とは異なり10巡であった。

(7) 成績の表記は、射量が単巡であるか複巡であるかによって異なることがわかった。複巡の場合は射量（巡）と中った矢の数（矢）と総点数（分）が先に表示され、その後各巡別の成績（中）が表示されていた。しかし、単巡の場合は「矢」は用いず、「中」で成績が表示された。また、場合によってはさらに詳しく矢ごとに貫中か辺中か

までも表記したのであった。

(8) 現在は「角弓-柳葉箭-貫革」の弓術種目のみが伝わっているが、18世紀末の朝鮮には多様な弓術が存在した。当時の朝鮮ではそれぞれの弓矢の役割を生かすため、正確性を競う種目、射距離を競う種目、破壊力と正確性を競う種目など、実戦に備え射距離や的や得点方式の異なる多様な弓術が行われた。世界各地で火薬兵器が普遍化する18世紀末においてもこのような多様な弓術が行われていたことから、当時の朝鮮弓術はなお高い実用性を備えていたことを窺うことができる。

注

- 注 1) 1876年以後、韓国が西欧文物の影響を受け、従来の封建的社会秩序から抜け出て近代的な社会へ開化する時期（辞書編集局編：東亜新国語辞典，第4版，豆山東亜，2003）。
- 注 2) 業務日誌。各行政機関が業務の先例を記した記録（辞書編集局編：東亜新国語辞典，第4版，豆山東亜，2003）。
- 注 3) 朝鮮時代に王室や国家の重要行事の顛末を整理した記録（辞書編集局編：東亜新国語辞典，第4版，豆山東亜，2003）。
- 注 4) 日本統治下「朝鮮弓術研究会」が「朝鮮弓道会」に改称されたこと（1932年）をきっかけに、「弓術大会」より「弓道大会」が広く使われるなど、「弓術」の代わりに「弓道」が多く用いられるようになった。同時期に日本で「弓術」を「弓道」に改称し始めたことや、朝鮮総督府から任命された人物が朝鮮弓道会の役員を務めたことから、弓術から弓道への改称には日本の影響があったと考えられる。戦後には「弓術」という名称が復活されたが、洋弓（アーチェリー）の普及後は洋弓に対応する言葉として「国弓」も使用されるようになり、現在では「弓道」「国弓」「弓術」が併用されている。
- 注 5) 弓術を学ぶ、弓術を練習すること。現在の韓国の弓道界では弓道の稽古を習射という。日本では桑村常之助の『弓矢と習射』（日本之弓道社，1938）などで使われている。
- 注 6) 射礼の際、的の真ん中に熊などの動物を置き、それを的中するとその動物を獲得した意味で「獲」と書き、このことから「獲」は的中のことを指すようになった（『国朝五礼儀』巻6：軍礼）。これに関連する用語としては獲旌、獲貫、獲唱などが

ある。獲記紙とは射手の矢数を記録した巻物形式の試紙である（大韓弓道協会，2000）。

注 7) 真景時代とは、朝鮮王朝後期の文化絶頂期を称える文化史的な時代区分の名称であり、その期間は肅宗代（1675—1720）から正祖代（1777—1800）にかけての125年間である（チェ・ワンス，1998）。

注 8) 15世紀から行われてきた大射礼などの大規模な弓術行事は、正祖時代を最後に断絶し19世紀からは行われなくなった。

注 9) 御射とは王の射、つまり王が弓を射ることを、また古風は王が弓を射る時、参席した臣下らに物品を下賜することを示す。即ち、『御射古風帖』とは王が弓を引き、その記念に臣下らに賜り物を授けたのを記録した書帖である。古風の辞書的な意味は、新たに赴任した官員が典礼によって人事・赴任と関係がある官庁の書吏・下隷らに祝儀を与えることを言う。「昔の風習（古風）に従い」行われたこの慣行の言葉がその証書を指すようになり、その金銭を古風銭といった。朝鮮時代は中央での人事よりも地方の人事に目立つ。新たに任命された官員はその人事と関係のある官庁の役人（胥吏・下隷・別監・司鑰など）に金品を与えるが、その際直接与えないで誰にいくらかを与えよという証書（古風）を書き、その村の京邸吏（各地方のソウル事務所の官吏）が金を与え、京邸吏は後で古風を書いた官員から金を受け取った。その際、与えた金額にいくらか上乗せして受け取ったと言われている（斗山東亜百科事典研究所，1996）。このほか、朝鮮時代に都城を守る各営門の大將が射亭を訪問する時、射員らに試合をするよう金を渡すこと（金鏤，2005）。

注10) 主義・利害などを同じくする仲間。後漢・唐・宋・明代に発生した政治的党派、官僚が政治的に結合したもの（新村出編：広辞苑，第6版，岩波書店，2008年）。

注11) 正祖は宮殿に刺客が侵入するなどの宿衛体制問題を改善するため、1782年に新しい宿衛軍（約30人）を結成した。そして1785年、実父の尊号を昇格させてそれを祝う臨時武科試験を実施し、その合格者を宿衛軍に加えて親衛部隊「壮勇衛」（約50人）を編成した。正祖は王権強化を警戒する大臣の反対にもかかわらず、1787年に親衛部隊を「壮勇庁」（約120人）に、さらに1788年に「壮勇營」（約500人）へとその規模を徐々に拡大し、軍権掌握への礎を築いた。

注12) 独占商業制度を競争市場経済に変える経済政策。

注13) 有能な若手の文臣を選抜し、奎章閣に委託して教育させる制度。

注14) 政治・経済・社会などの現実的な問題を学問的に研究・解決するため、正祖が即位した1776年に創られた朝鮮時代の国立機構である。主に資料や図書を収集、保管、出版する国立図書館で学問研究所の役割も果たした。

注15) 射手が1回射位に立ち、一人1本ずつ順に射て全員が手の矢を射切ることをいう。各巡に通常一人5本の矢を射る。

注16) 現在までに発掘され、本研究で用いた『御射古風帖』からだけでも、宮殿の内苑で行い奎章閣文官へ古風を授けた御射（『御射古風帖』，奎10252；陸軍博物館），楊州官庁で行い楊州牧使へ古風を授けた御射（『御射臺帖』，奎9985），永興府使へ授けた御射（『御射古風帖』，奎9991），壮勇堂武官へ授けた御射（『御射古風帖』，古大4206-80；陸軍博物館）など、様々なところで御射が行われ、それに関わった文武官僚に多様な賜り物が授けられたことがわかる。

注17) 武科試験の種目であり、普段多く使われた柳葉箭（8錢，32g）や木箭（8錢，32g）に比べ、鉄箭は6両（240g）という非常に重い矢である。

注18) 清野入保あるいは堅壁清野戦術と呼ばれる朝鮮の伝統的な戦術。数的劣勢から前面对決を避け、城に籠る長期戦によって敵の戦力を消耗させ、最終的に退却させる作戦（鄭道傳，1791刊）。

注19) 標準射距離は時代や試験によって多少変わるが、通常柳葉箭は120歩、片箭は130歩—180歩、鉄箭は80歩—100歩であった。

注20) 夜に行う弓術のことで、日没後に「貫革」の的に向かい「柳葉箭」で射る弓術種目の一つ。矢の飛行軌道が確認できないため、距離感や方向感をつかむのが難しく、昼間に行われる弓術に比べ的中率が低い。

注21) もともと貫と辺の区別のない的に、貫中と辺中を区別するため、貫に該当するものを貼り付けること。

注22) 史料では「李堯憲」の「堯」が脱字になっている。李堯憲（1766—1815）は、正祖9年（1785）に武科試験に及第し、兵曹判書（防衛大臣）、漢城判尹（ソウル市長）、禁衛大將（国王護衛・首都防衛司令官）、刑曹判書（法務大臣）などを歴任した。弓術に優れ正祖の寵愛を受けた（韓国歴代人物総合情報システム，韓国学中央研究院）。

注23) 正祖実録16年10月30日：「私は生まれつき弓術が好きであった。またそれが先業を引き継ぐ一つ

の仕事だと考え、若い時にはよく弓を引いたし、射れば40余発を当てたこともよくあった。しかし、この10数年間は弓術をおろそかにしたり、引いても数巡に止まったりして10巡をすべて射終えたことはなかった。今月12日に初めて10巡を射たが、その日は41本を中て、50点を得た」

注24) 現在の弓術競技の場合、中てる度に貫と辺の区別なく試官が「貫中です」と叫ぶが、1970年代以前から弓を引いている者が試官を務める場合には、「辺です」という叫びを聞くことが少なくない。さらに、90歳以上の射手を対象に著者が行った聞き取り調査（2010年実施）では、多くの人が1960年代ごろまで貫と辺を区別していたと証言している。

文 献

- 裴祐晟（1991）正祖年間武班軍営大將と軍營政策．韓国史論，24: 207-272.
- 裴祐晟（2001）正祖の軍事政策と『武芸図譜通志』編纂の背景．震檀学報，91: 331-354.
- 崔恒ほか（1485）経国大典．巻4，兵典．
- チェ・ワンソ（1998）真景時代．ドルベゲ（出版社）．
- 趙斗淳ほか（1865）大典會通．巻4，兵典．
- 朝鮮王朝実録 世宗実録（1473），世宗13(1431)年3月12日の記録．
- 朝鮮王朝実録 世祖実録（1471），世祖13(1467)年8月4日の記録．
- 朝鮮王朝実録 成宗実録（1499），成宗3(1472)年4月18日の記録．
- 朝鮮王朝実録 燕山君日記（1507），燕山君9(1503)年4月20日の記録．
- 朝鮮王朝実録 宣祖実録（1616），宣祖25(1592)年5月23日，27(1594)年9月1日の記録．
- 朝鮮王朝実録 正祖実録（1805），正祖1(1777)年7月25日，正祖3(1779)年9月25日，6(1782)年1月12日，7(1783)年12月10日，16(1792)年10月20日，16年10月30日の記録．
- 朝鮮王朝実録 純祖実録（1835），純祖14(1814)年間2月25日の記録．
- 朝鮮王朝実録 高宗実録（1935），高宗37(1900)年6月11日の記録．
- 忠南発展研究院（1998）朝鮮前期武科殿試儀考証研究．忠清南道牙山市忠南発展研究院．
- 大韓弓道協会（2000）韓国の弓道．
- 『御射臺帖』（1792）ソウル大学校奎章閣，奎9985．
- 『御射古風帖』（1792）ソウル大学校奎章閣，奎9991．
- 『御射古風帖』（1792）ソウル大学校奎章閣，奎10252．
- 『御射古風帖』乾（1791）ソウル大学校奎章閣，古大4206-80-1．
- 『御射古風帖』坤（1792）ソウル大学校奎章閣，古大4206-80-2．
- 『御射古風帖』（1792）陸軍博物館．
- 韓永愚（1998）正祖の華城行次，その8日．ヒョウヒョン出版．
- 鄭道傳（1791刊）三峰集．巻13，陣法編 五守條．
- 姜性文（2000）朝鮮時代の弓の軍事的運用—発射法の戦術的な運用を中心に—．学芸誌（陸軍博物館），7: 59-81．
- 金鏤（2005）国弓教本．黄鶴亭．p. 364．
- 『国朝五礼儀』（1475）ソウル大学校奎章閣，奎1136．
- 陸軍博物館（1994）図録「韓国の弓と矢」．陸軍博物館（Korea Military Museum）．
- 桑村常之助（1938）弓矢と習射．日本之弓道社．
- 李徳懋ほか（1790）武芸図譜通志．御製序の一．
- 李重華（1929）朝鮮の弓術．朝鮮弓術研究会．
- 李晔光（1604）芝峰類説．巻18，技芸．
- 李泰鎮（1985）朝鮮時代政治史の再照明．汎潮社．
- 李泰鎮（2006）朋党政治の成立と展開．ソウル大学校出版部．
- 羅永一（2003）正祖時代の武芸．ソウル大学校出版部．
- 辞書編集局編（2003）東亜新国語辞典．第4版，豆山東亜．
- 徐榮輔・沈象奎（1808）萬機要覧．軍政編．
- 申叔舟（1474）国朝五礼序例．兵器図説．
- 沈勝求（2000）朝鮮時代武科に現れた弓術とその特性．学芸誌（陸軍博物館），7: 83-106．
- 孫永植（2009）韓国の城郭．ジュリュウソン（出版社）．
- 斗山東亜百科事典研究所編（1996）斗山世界大百科事典．斗山東亜．
- 黄鶴亭百年史編纂委員会（2001）黄鶴亭百年史．黄鶴亭．
- 『園幸乙卯整理儀軌』（1795）ソウル大学校奎章閣，奎14518—14534．

（平成24年3月14日受付）
（平成24年6月13日受理）